（別紙4）　　2019　年度

1　自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	3290400245		
法人名	サンキ・ウエルビィ株式会社		
事業所名	グループホーム出雲		
所在地	島根県出雲市大社町北荒木1313		
自己評価作成日	令和2年1月6日	評価結果市町村受理日	令和2年4月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	株式会社ワイエム
所在地	島根県出雲市今市町650
訪問調査日	令和2年1月23日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

開設11年が過ぎ少しづつであるが地域の皆さんとの関わりも深まってきたと確信しています。2019年11月の秋祭りもたくさんの地域の方々にご参加いただき賑やかな催しを成功することが出来ました。また地域で安心して頼っていただけるような存在でありたいと人材育成、研修の充実、常に明るく働きやすい職場環境作りに努めています。利用者様家族様とも信頼関係を第一に考え日々のケアにあたっています。利用者様にはグループホーム出雲で暮らせてよかったと思って頂けるような支援をさせて頂くとともに、職員自身が笑顔で仕事をすること、やりがい、満足感を持つことを大切にしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

広島県に本社がある医薬品メーカーである株式会社サンキは、2000年にサンキ・ウェルビィ株式会社として独立し、中国4県で介護事業を展開してきた。島根県において、グループホームは3拠点あり、各々が独自の理念を立て、利用者さんが、活き活きと暮らせるよう質の高いケアを実践してきた。出雲ホームにおいては、運営推進会議に、地域を代表する社会福祉法人からの参加もあって、連携することで地域のニーズを包括的にとらえ、より住民に密着したケアに努めており家族の評価も高まっている。要介護度は3、4と認知症が進んでいる方も多いが、外出や軽運動など日々のスケジュールに活動的な内容を盛り込みながら、喜びや笑顔などを引き出すよう取りくんでおり家族からの評価も高い。地域にも開かれたホームを目指して、地域の行事や活動に参加しており、避難訓練には地元消防団とも協力して行っている。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
		○	3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）		1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
		○	3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）		1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
		○	3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に掲げている　・愛されること　・ほめられること　・役に立つこと　・必要とされることをいつも念頭におきながら、利用者がその人らしく暮らしていけるような支援を心掛けている	理念は職員全員が認知しており、利用者さん方は、家族のように大切にされている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の保育園へリサイクル活動の協力をしている。畑作業を通じて地域の方との交流を深められた。ただ一定の方との交流に留まっており今後はもっと広がりを持てるような働きかけをしていきたい。	町内会に入り、町内の一員として清掃などにも参加している。防災時はもちろん、近くの新施設の足湯にでかけたり、さまざまな祭りにも行ったり、また、ホームの祭りに人々を招くなど日常的なおつきあいをしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の老人会の方々への認知症勉強会を行ったり、出雲市からの認知症サポーター養成講座の依頼があれば予定を調整し複数名の職員と講座に出かけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1度の会議では会議内容をしっかりと準備し報告している。活動報告などは写真を用いてわかりやすく伝えている。しかし頂いた意見をスタッフ間で共有することは不十分であった。	会議では、参加者からの活発な意見が出ており、議題も、行事への参加や警察署からも防犯の研修会に来てもらったことなど、家族参加者からもホームのより良い理解につながるなど、意義深い会議になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	高齢者福祉課、地域連携室などの担当者とも日頃の業務や相談ごとなど連絡させて頂くことも多くあり連携は十分に取れていると思う。	市の担当者とは、運営推進会議のみならず、利用者さんのケアについてや制度のことなど、相談できる体制にある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月の拠点会議において身体拘束適正化の研修に取り組んでいる。拘束の現状は0件だがそれで良いではなくスピーチロックなども含めた広範囲での拘束をテーマに掲げ日々の業務の振り返りをおこなっている。	身体拘束は、全く行われていない。利用者さんは、いつでも、自由に過ごすことが出来る。身体拘束禁止の研修などには、積極的に参加しており、内容をホーム内に伝えることで、職員の身体拘束への意識が高まっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	年に一度、全スタッフが虐待についての現任研修を受けている。また全てのスタッフが虐待について「しない、させない」という高い意識を持ち業務にあたっている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在そのような制度を必要とされる利用者はいないが、権利擁護に関する制度については知識が乏しいので理解を深めるために学ぶ機会を持つ必要性がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約・改定時には十分な時間を取り説明させていただき納得を得ている。また、不明な点や疑問点にはどんな些細なことでも質問して頂きやすいような関係作りを普段から作っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に3回介護相談員が来訪され交流を交えながら利用者の声を聞き出される。家族とは日頃から信頼関係を築く努力をしているつもりではあるが、今後、家族会などを利用し意見交換や要望を引き出せる場面を作っていきたい。	日頃から、家族の面会が多く、ホームのことをよく知っているため、ケアに対しても多くの感想や意見が、会議に出席した家族さんから出されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の拠点会議や毎日の朝礼時、業務中の会話の中から職員の意見や提案を大切にするよう心掛けている。会議においても伝える一方にならず皆が意見を出しやすいような会議体を開催するよう努力している。	管理者や施設長は、職員の拮抗する意見がある場合も、良い関係を保ちながら問題解決できるよう、良好なスーパービジョンを実践している。職員はアイデアや意見を大いに表現できる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は現場の状況把握に努め各職員ともしっかりコミュニケーションを取っている。各人の向上心、やりがいが持てるよう声掛けや具体的配慮に心配りをしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の現任研修の他、外部研修の必須を計画している。新人研修に対してはチューター制度を採り入れ丁寧な育成に取り組んでいる。またチューター以外の職員も人材育成にフォロワーとして協力し皆で人を育てようとする風土がある		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑ連絡協議会開催での事例発表会などに参加し他事業所の取り組みなど学んだ。自社内の拠点同士の交流など秋祭で行えた。他事業所では秋祭や夏祭などを通じて参加させていただきたくさんの刺激を受けた。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族からの情報やこれまでのサービス利用の情報を少しでも多く集め入居前に職員で共有するよう心掛けている。排泄関係の不安や環境の変化に伴う不安などには特に配慮し、その人の気持ちに寄り添う努力をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族からの情報、要望を聞き出す時間を多くとり信頼関係に努めている。初期のあいだは特に頻繁に連絡を取りホームでの生活の様子を電話で報告するなどして家族にも安心して頂いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ホームでの暮らしの中で必要とする支援を管理者を中心に職員と考え、必要なものがあれば用意したり、家族様に準備して頂き本人がすぐに困らない対応を心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が役割を持って生活できるよう洗濯物仕事や食器洗いなどして頂いているが、それ以外の本人のできることについては今後もっと考えていく努力をしていかないといけない。また全員が役割を持てていない現状もある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会、誕生日会、同行受診など家族の協力も得て家族との絆作りも出来ている。週末自宅へ外泊される方や一時外出される方も以前に比べ多くなり家族の積極的な支援を感じている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前の地域の方との関りは不明なことも多く家族任せになっている。しかし、お知り合いがホームへ訪ねてきて下さる機会がある時にはゆっくり過ごしていただく時間や環境作りに努めている。	入居者は地元が多いことから、ほとんどの利用者さんの家族さんが、毎月あるいは　毎週のように面会に来る。併設の小規模多機能ホームから移行してきた方も多いことから自然な人間関係が継続されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士楽しく会話されている時は無理に立ち入らずその場の交流を大切にしている。その時々に席順にも配慮し楽しく過ごせるような場面を作るよう努力している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了した方にも年賀状や行事の案内を出すなどしてお付き合いを大切にしている。また以前の利用者の親戚の方が新規利用に繋がった人もいた。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人からの思いや意向を聞き出せるような会話をする努力はしている。難しい場合は家族から好まれる生活やその人なりの暮らしぶりを聞き一人ひとりの思いを把握する努力をしている。	本人が言いやすい雰囲気を作ったり、普段の何気ない会話の中で意向をつかんでいる。認知症の進行で思いを言葉で表現出来ない方には、家族や在宅での関係者に利用者さんの様子を聞き取ったことなどを人型シートに詳細に書き込まれており、チームとしてしっかり取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人から聞き出せることは会話を通じて暮らし方や生活環境の把握に努めている。またその人を知るという観点から多方面からみたたくさんの情報を人型シートというものに書き出し関わりのヒントに役立てている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の体調には十分気を付けて観察しているつもりであるが精神面については見えていないことや努力に欠けていた。何ができるのかということをもっと知る必要があった。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月担当者がカンファレンスを行いケアに反映させている。またモニタリングから感じること見えてくることをチームで積極的に意見交換し合うということについては努力が足りていなかった。	ご本人・家族さんを中心に、職員全員で利用者さんのアセスメントを行いながら、利用者さんの思いや状況に応じた介護計画が作られており、定期的あるいは、変化のあるときに見直されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	支援経過に様子や状態について記録し職員間で情報の共有に努めた。また記録のみに頼らず口頭での共有も意識的に行った。しかし本人の言葉やエピソード記録については少なくもう少し努力すべきであった。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	予定以外の急な外泊、外出には柔軟に対応し臨機応変な支援をしている。毎日の朝礼時一人ひとりの情報共有に努めその日、その時に必要なケアを行う努力をしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	月一度の外部ボランティアの余興を楽しめた。移動美容室や行きつけの美容院の利用が出来た。地域に新しくできた足浴場を利用し楽しんだ。他にも利用できる地域資源はあるはずなので今後取り組みに力を入れていくべきである		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族が希望するかかりつけ医に診て頂いている。また突発的な専門医への受診は家族対応とし協力を得ている。家族同行が不可能な時は職員の代行も行う。家族との受診前後の情報共有も密に行えている。	受診については、利用者さん家族さんと相談しており、適宜対応している。協力医に往診を依頼している方も多い。内服薬については、処方内容や説明書を職員全員が読んで、作用・副作用などを確認し、看護師などと協力している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員の配置はないが協力医の看護師との連携は密に取れている。褥瘡処置や点滴対応時などは職員との情報の記録、伝達をもとに確実な連携を行えた。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時速やかに情報提供書を医療機関に届けている。また、医師、看護師と退院に向けての情報交換を密に行い、家族の意向も含めて早期の退院を勧めている。必要に応じては退院後のケアの変更など職員と十分に話し合うことができた。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期が近づいてきた頃、家族とどのような方針で最期の時間を過ごすのか密に話しあう場を設けている。看取りを希望される場合は計画書を作成し主治医、家族と共通の理解をしチーム全体で支援している。	本人には聞きにくいことだが、家族からは終末期の相談があるという。見取りの事例もあったことから、本人家族医師職員などがよく話し合い今後も取り組んでいく。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員がAEDなどの応急手当の研修を毎年学習している。しかしいざという時、確実適切な行動が出来るかという不安は感じる。具体的に不安なことを出し合い話し合ったり研修で学習するなどに力を入れていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災や地震からの津波の想定など色んなシーンに備えて訓練を行っている。その都度前回の訓練から学び得たものを次の訓練に活かしている。今年は塞がれた道路もあると想定し避難経路を定めずに避難する体験をしてみた。	利用者参加の避難訓練を行っている。昨今の災害対応の国の指針を受けて、地震や水害などの際には、高い位置になる浜山へ向かって避難することになっており、市の防災マップを参考にしながら地域住民や地元消防団との協力を図っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として敬意を持ち接するように心がけている。しかし時々今の声掛けには問題があったのではないかと反省することもあった。ケアが業務になりつつあると言葉も乱れてくるので気をつけていきたい。	声の掛け方や言葉遣いには、丁寧になるよう常に気をつけている。個室にはノックして入る、排泄、入浴など肌を露出しなければならない場面でのケアには、さりげなく覆ったり、視線をはずすなど、配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	伝えたいことやお願いしたいことを本人が選ぶ返事が出来るような場面や質問にするよう心掛けている。急ぐことでこちらが決定してしまうこともあるので気をつけていきたい。意思表示ができない人は表情や反応に気をつけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的に1日の流れに沿って過ごして頂いているが、体調や気持ちに合わせ個人のペースも大切にしている。入浴などもこちらで予定をたててしまうがその時の本人の気持ちが向かわなければ日にちを変えるなど柔軟な対応を行った		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自己決定ができる方には入浴後のブローの好みを尋ねたり、洋服も職員と一緒に考える時もある。ヘアカラーなども家族の意向も聞きながらその人らしいおしゃれが出来るよう支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	畑で野菜作りを始めたので収穫時期には職員と一緒に収穫した野菜で料理をした。新鮮な野菜で作る料理は美味しく職員とも一緒に昼食をとる場面が多くあった。片付けができる利用者も楽しまれた。	食事は、職員も交えて和やかな雰囲気で行われる。職員が交代でつくる手料理も添えられ、家庭的である。陶器の食器や手拭いゆかりのランチョマットなど、品の良い食卓を演出している。月に何度かは、利用者さんも料理やおやつ作りに参加して、作る楽しみも味わっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分量は1日1000CCを目標に定めているが季節や体調によりそれ限りではない支援を行っている。一人ひとりの習慣（梅干し、ヤクルト）や必要な方には高カロリー補助食などの提供も行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入れ歯利用の方が2名、他7名は自歯または残り少ない残歯で食事をされている為食後の残渣物は多くある。本人に歯磨きして頂いた後仕上げ磨きを行うが口を開けるという理解が難しい方や他者が磨くということに抵抗のある方もいて難しさもある。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時誘導のみならずその時々の表情や様子を含め排泄の声掛けを行っている。布パンツ利用の人も汚染する頻度が多くなったりと変化する為紙パンツやパット類を本人に合わせて検討し快適な支援を行っている。	入居してから数週間程度で、利用者さんの排泄パターンを観察して把握した後は、時間帯に合わせて、さり気なく促しなどを行って、トイレでの排泄への支援を行っている。トイレは、明るく清潔で、臭いも全くない。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便間隔をチェックし便秘になりがちな人には注意し朝の牛乳提供や体操を心掛けている。軟化剤を利用する人には職員間で間隔の情報を共有し適正な日数で服薬介助している。二人の人に関しては自立されている為排便状況が掴みにくくトイレ後の環境に気をかけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回以上の入浴を確保している。外泊予定や行事予定などからもある程度予定は立ててしまうが全職員がその予定に限ったことではないと心がけている。まずは本人の気持ちが入浴したいかどうかを確認している。	利用者さんは、清潔だけでなく、リラックスしたり、体が温まって、よく眠れるようになるなど様々な効果があるような入浴支援を受けられる。普段話せないことも会話に上ったりする。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本は一人ひとりが自分の思いのままに過ごして頂けるよう支援している。その1日の流れの中にレク活動や食事時間があるが気が向かない時には無理強いをせず休息してもらったり一人で過ごす時間も過ごして頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	居宅療養管理指導を利用し適宜、主治医、薬剤師と情報の共有に努めている。変化や疑問についてはそのままにせず薬剤師に尋ねるなどしてその都度理解に努めている。薬リストは個人ファイルに閉じ職員が見れる環境にある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全利用者を対象には支援できていないが数人の利用者には経験のある畑仕事を手伝って頂いたり季節ごとの外出支援、今年度は他拠点への秋祭り参加も実行できた。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節的に外出しやすい時期は施設周辺の散歩や車でのドライブを楽しんだ。車椅子利用の方も近隣の散歩コースを楽しんだ。カフェにおやつを食べに出かけることもできた。今後自立している方も増えたのでできる支援を広げていきたい	ホーム周辺の散歩は日常的に行われている。ファミリーレストランやカフェ、くるくる寿司屋など、外食を楽しみに出掛けることも多い。不穏な気分になる場合も、職員が同行して出かけることで気分が変わって落ち着く事が多い。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の所持金は家族より預り金として管理させて頂いている。普段お金を所持し使えるような場面がないが、今後その様な場があればその方の希望や力に応じて使えるような支援をしていきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から電話をして頂くような機会は今のところないが必要に応じては支援していきたい。年賀状は3名の方が職員が手伝いながら完成することが出来た。多い人は一人で7枚書かれた。また手紙や季節に応じたはがきを出すこともしていきたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には季節ごとの壁面飾りや不快にならない程度の綺麗な飾りなどで全体的に明るい雰囲気作りをしている。湿度に関しては冬場は快適な湿度が保ちにくい現状であることから時々の喚起や加湿器で補っている。	ホールは、明るく広々と開放的であり、厨房では、職員が料理している様子が見えるオープンキッチンになっており、家庭的である。四季を感じられるように生花や飾りもあって、くつろいで暮らせるよう配慮されている。事務所もオープンカウンターで接しており、職員との隔てはない。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	この度ホールのレイアウトを大きく変えてみた。限りある空間と家具の配置換えだが個のスペースが生み出せたり人の集まりの場がテーブル以外に出来た。このレイアウトを全てと見ず季節、人の変化に応じて今後も変化をもたらせたい。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	床にベッド、畳みに布団、今までの生活環境に合わせたり、生活動作の変化に合わせ変更したり本人が安心、安全に過ごせる支援をしている。家族と相談し使い慣れた家具やタンス、写真などを居室内に用意して頂くような声掛けをしている。	利用者さんが自分だけの空間と時間を持てるように、また、大切なものや馴染んだことなどに囲まれるように、馴染みの家具や小物、家族の写真など個性的な個室作りへの配慮がみられる。職員が工夫した装飾も定期的に更新している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	その時々の環境で困られることがあれば、どこまでが出来るのか、どうすればわかるのかを職員で話し合い不安や混乱、失敗を回避できるような環境作りに努めている。転倒リスクを考えてソファーやテーブルの位置を配置している。		